

大学生の英語力調査
——1994年度と2008年度を比較して——

Research on College Students' English Ability
——A Comparison between 1994 and 2008——

石原堅司 (同志社大学) / 西納春雄 (同志社大学)
時岡ゆかり (大阪産業大学) / 吉村俊子 (花園大学)

Kenji ISHIHARA (Doshisha University)
Haruo NISHINOH (Doshisha University)
Yukari TOKIOKA (Osaka Sangyo University)
Toshiko YOSHIMURA (Hanazono University)

Abstract

This study examines the changes that have occurred in Kansai-area university students' English ability during the fifteen-year period between 1994 and 2008. In 1994 a survey of the English skills of approximately 1000 students was conducted at seven Kansai-area universities. A similar survey was conducted in 2008, involving 880 students from six Kansai-area universities. The tests and questionnaires used in the two surveys were the same. The results of the surveys were compared in order to assess any changes that might have occurred in the intervening fifteen-year period. Noteworthy declines in the students' English ability were observed. Several suggestions for improving English education for current university students are also offered.

1. はじめに

近年、「ゆとり教育」が推進され、教育現場では様々な取り組みが導入された。また、同時に学生の学力が低下していると言われている。大学での英語クラスにおいても、学生の英語力の低下傾向がみられる昨今であるが、具体的にどのように低下したのであろうか。また、実際にどのような変化が見られるのであろうか。

本研究は2008年度に関西地区の6大学、約880名の学生を対象に実施した英語力実態調査の結果を報告するものである。実際には、1994年度に実施された英作文実態調査と同じテストやアンケート用紙を使用し、15年間で学生の英語力や教育環境がどのように変化したかを比較、考察する。最後に、調査結果を基に、現在の大学生に対する効果的な英語教育の方向性を提案したい。

2. 英語力実態調査

(1) 1994年度の実態調査¹⁾

廣田、岡田、奥村、時岡（1995）は、大学生がどの程度、英語を「読む」「書く」経験をもっているか、また、これらの経験が英作文力に影響を与えるのか等を、関西地区の7大学、約1,000名の大学生を対象に調査した。調査では、まず学生の総合的な英語力を把握するためにクローズテストの一種であるC-Testを用いた。4月にC-Test 1をプリテスト、12月にC-Test 2をポストテストとして実施した。あわせてスピードライティングとアンケート調査も4月と12月に実施した。スピードライティングでは一定の話題について自由英作文を書き、writing fluency の目安として、決められたルールに従って総単語数をカウントした。4月のアンケートではこれまでの英語による読書体験、英作文体験、日本語による読み書きの体験等に関する調査を、12月のアンケートでは英作文に際して学生がどのような態度で臨んでいるか等を中心に調査した。また、自由英作文の質と量（単語数）との関係を検証するために自由英作文を評価した。評価方法は、広く採用されていることと、評価のしやすさを理由にJacobsのESL Composition Profile (Hughes, Wormuth, Hartfiel, &

Jacobs 1981)を採用した。この評価方法は5要素 (Content, Organization, Vocabulary, Language use, Mechanics) からなっている。全学生の4月の自由英作文から60名を無作為抽出し、5要素の項目別に採点し、4名の採点者の点数を平均して作文評価値とした。

(2) 2008年度の実態調査

1994年度以降、この15年で学生の英語力や教育環境がどのように変化したかを検討するために、関西地区の6大学、約880名の大学生を対象に、前回(1994年度)に実施された方法や調査項目を踏襲して、4月の最初と1月の最終授業に実態調査を実施した。本稿では4月の調査結果を1994年度の結果と比較する。また1994年度と同様にJacobsのESL Composition Profile を用いて自由英作文を評価し、作文の質と単語数の関係を検証した。4月の自由英作文から45名を無作為抽出し、5要素の項目別に採点し、4名の採点者の点数を平均して作文評価値とした。

3. 調査結果

3.1 C-Testとスピードライトニングの結果

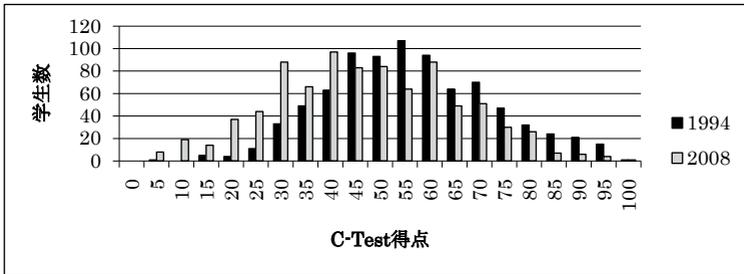
1994年度と2008年度のC-Testとスピードライトニングの結果の概要は、以下の通りである。有効なデータ数は、1994年度が830名、2008年度が866名であった。C-Testについては、平均値は1994年度に54.3であったものが44.8と約10ポイント低下している。

表1 1994年度、2008年度のC-Testの平均値比較

	1994	2008
学生数	830	866
標準偏差	16.5	18.2
平均値	54.3	44.8
中間値	53	44
最大値	99	98
最小値	4	2

これを5点刻みのヒストグラムで表すと以下のようになる。2008年度においては、特に下位群の増加が顕著である。

図1 C-Test得点分布



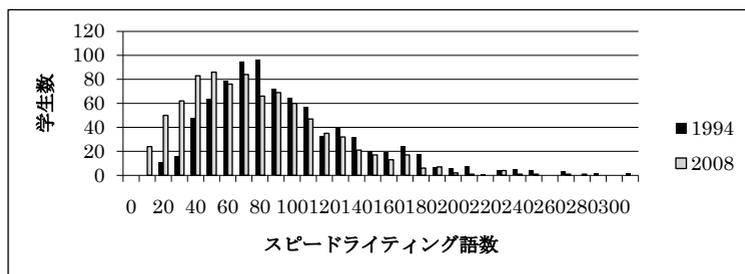
スピードライティングの結果も、C-Test同様に低下傾向が見られる。平均値は、1994年度が92.7であったのに対して、2008年度は73.7と、約20ポイント低下している。

表2 1994年度、2008年度のライティングの平均値比較

	1994 語数	2008 語数
学生数	830	866
標準偏差	47.9	44.1
平均値	92.7	73.7
中間値	81	67
最大値	307	280
最小値	11	3

これを10ポイント刻みのヒストグラムにすると以下のようになる。やはり下位群の平均語数の減少が顕著である。

図2 スピードライティング語数分布



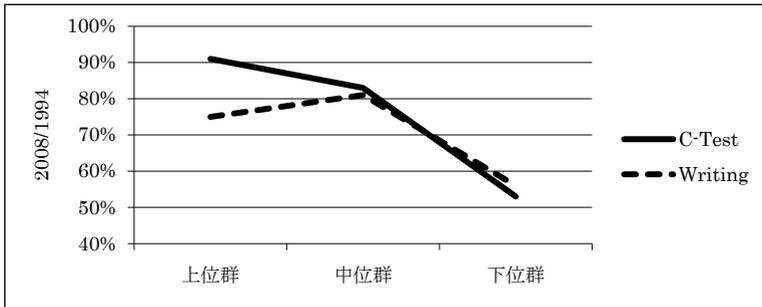
次に上位、中位、下位群の3つの群に分けて比較する。それぞれの群は、まずC-Testの得点順に並び替えた後、上位群は最高点から100名、中位群は中間点から前後にそれぞれ50名計100名、下位群は最低点からさかのぼって100名を取った。表3の最下段は、1994年度の数値で2008年度の数値を割ったパーセンテージである。

表3 1994年度、2008年度のC-Testとスピードライティングの平均値比較

	上位群		中位群		下位群	
	C-Test	Writing	C-Test	Writing	C-Test	Writing
1994	83.2	153.6	53.1	89.3	28.3	57.6
2008	75.6	115.5	44.3	72.7	15.1	32.2
2008/1994	91%	75%	83%	81%	53%	56%

下位群になるほど点数が下がる傾向があることは、数値をグラフ化してみるとより明らかになる。中位群はスピードライティングの結果が多少上昇しているが、下位群ではC-Test、スピードライティング共に大きく落ち込んでいる。

図3 1994年度、2008年度のC-Testとスピードライトニングの平均値比較



スピードライトニングの語数とライティング評価の相関を調査した。その結果、1994年度においては、語数と評価の間に高い相関が見られたが、2008年度においては、相関の値は著しく低下している。これは、1994年度においては、語数がライティングの質の指標となりえたが、2008年度においては、指標とはなりにくいことを示している。すなわち、語数を多く書いても内容が希薄、ないしは内容の構成や文法的な誤りが多い可能性を示している。

表4 スピードライトニング語数と評価の相関比較

1994 年度	0.92	(上・中・下位群計 60 名)
2008 年度	0.77	(上・中・下位群計 45 名)

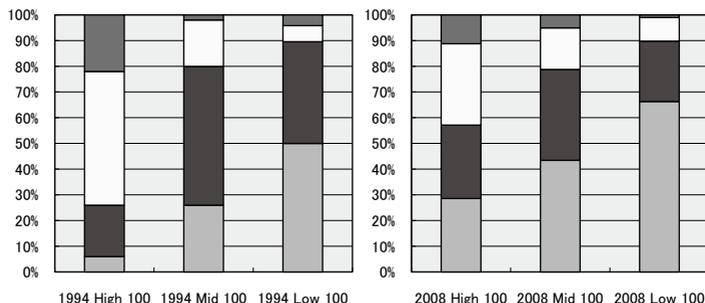
3.2 アンケート調査結果²

アンケート調査の結果を概観すると、以下のような傾向が見られる。1) 授業時間外の英文の読書量が減少した。2) 英作文あるいはライティングの指導を受けたものは上位群で増加している。3) 英作文あるいはライティングの経験は全体的に増加している。4) 提出物へのフィードバックは上位群により手厚くなった。5) 日本語の文章作成経験は増加している。6) 特に説明・意見を述べる、要約・感想を述べる文章を学習者達はより頻繁に書いていることが伺える。以下、1994年度と2008年度の結果に顕著な差がある項目を中心に、双方の結果を比較して考察する。

質問2では1994年度の調査結果と比較すると、2008年度においては特に上位群において読書体験が減少している。以下、理解しやすいように結果をグラフ化する。なお、以下の棒グラフにおいては、回答項目の1, 2, 3…は、有効回答の総数を100%として、それぞれグラフの下の帯から上に向かってパーセント幅の帯で示している。

2. 授業時間以外に（宿題も含めて）やさしい英語で書かれた新聞・雑誌記事、物語などを自分で選んで、楽しみや情報のために読んだ経験がありますか。
 1. まったくない 2. ほとんどない 3. いくらかある 4. たびたびある

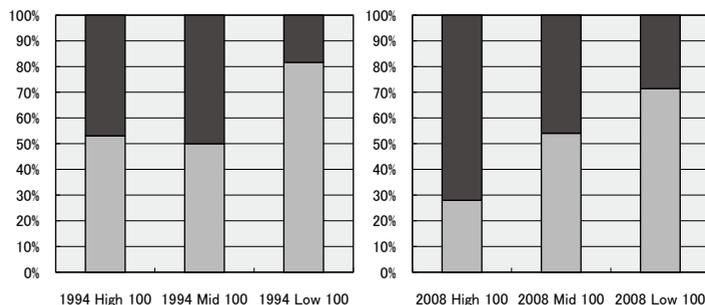
図4



質問3の回答結果からは、2008年度においては、上位群に英作文だけの時間を体験した経験が著しく増加していることが読み取れる。

3. 英作文だけのための独立の時間を体験したことが
 1. ない 2. ある

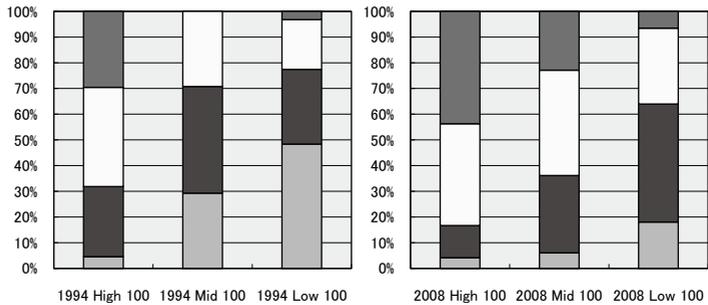
図5



質問9によれば、自由に英語で文を書いた経験は、3つの群に共通して増加している。

9. ある話題について自由に英語で文を書いた経験
 1. まったくない 2. ほとんどない 3. いくらかある 4. たびたびある

図6



質問17によれば、提出した作文のフィードバックは、1994年度は「検印だけつけて返してもらった」が比較的多いが、2008年度においては、上位群においては少なくなっている。「訂正を記入して返してもらった」が2008年度には、特に上位群に多くなっており、この群へ手厚い指導がなされていることが推測される。

17. 提出したことのある人は、提出した作文をどんな形で返してもらいましたか。
 1. 書いたものを提出するだけ... 2. 書いたものは検印だけ... 3. 書いたものはA, B, C, などの全体的な評価だけ... 4. 書いたものは誤りに印だけ...
 5. 書いたものは誤りの訂正を記入... 6. その他の方法で返してもらったことのある人... (詳細は註2参照)

図 7

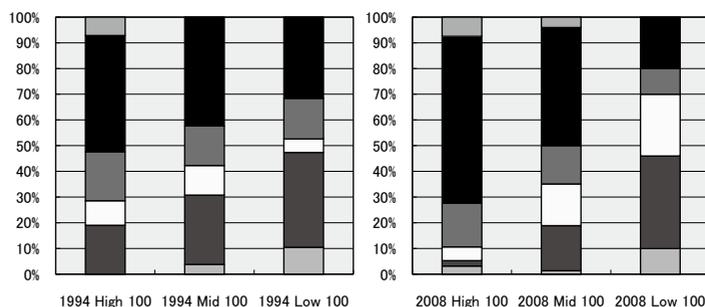
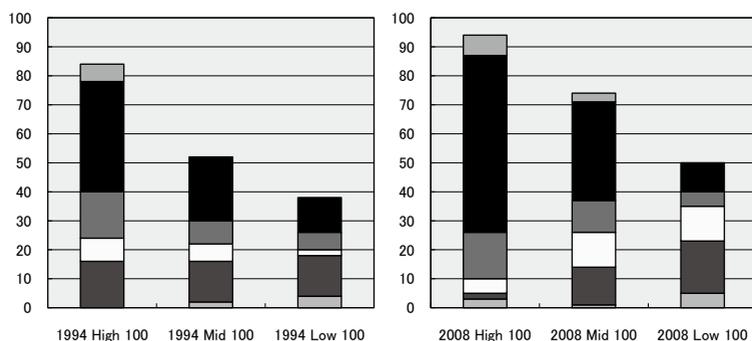


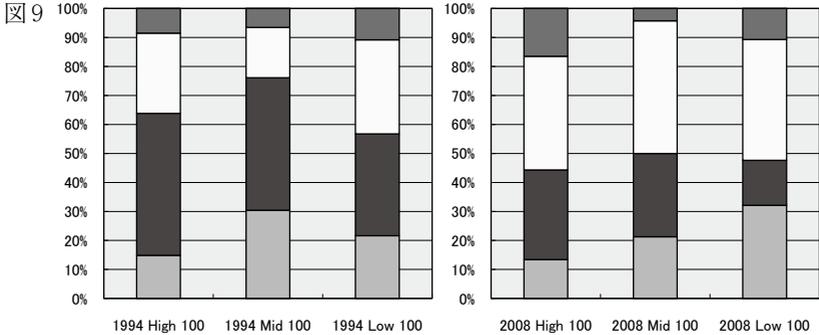
図7のグラフに回答者の実数を反映してみると、フィードバックを得た学習者の数は2008年には3群ともに大きく増加しているが、フィードバックは特に上位群に手厚くなっていることが読み取れよう。

図 8

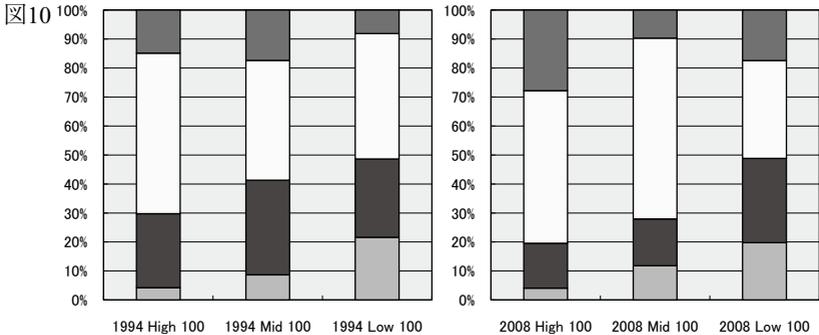


質問18, 21によれば、1994年度と比較すると、2008年度においては、ほぼ全ての群において、「説明・意見」、「要約・感想」を述べる日本語の文章を書いた経験を持つ学習者の割合が増加している。日本語での意見形成の訓練は、特に、上位群と中位群において、以前と比較すると頻繁になされていることが推測できる。

18. (日本語の文章を書いた経験について) 歴史、時事、社会問題などについて説明したり意見を述べたりする文
 1. まったく書いたことがない 2. ほとんど書いたことがない 3. ときどき書いた 4. たびたび書いた



21. (日本語の文章を書いた経験について) 読んだものを要約したり、感想を付け加えたりする文
 1. まったく書いたことがない 2. ほとんど書いたことがない 3. ときどき書いた 4. たびたび書いた



4. 考察

表3に示したように、2008年度のC-Testとスピードライティングの平均値は、1994年度に比べて下がっている。C-Testは総合的な英語力を、また、スピードライティングは書く量と質を評価できるが、この2つの年度間には英語力の差が明らかである。

今回顕著であった点は、上位群、中位群、下位群を比較した場合、下位群においては1994年度と2008年度の差が、他の2群に比べて極めて大きいことである。すなわち、C-Testに関しては1994年度の平均点の53%のスコアしかなく、スピードライティングの結果は1994年度の平均語数の56%の語数であったことから、下位群における学力の落ち込みが顕著であると言えよう。その要因としては、大学進学者の学力の幅が拡大したことや、大学入学前の英語学習内容の差が拡大したことなどが考えられる。後者に関しては、学習指導要領によると、1994年度大学入学者の中学一年時（1988年）の学習英単語数は900-1050語で、そのうち必修が490語であったのに対して、2008年度大学入学者の場合には900語となり、必修は100語と激減している。さらに、1998年には「個性を生かす教育」の名のもとに、総合的な学習の時間を3割削減するとの方針が打ち出され2002年より施行されたが、これは2008年度大学入学者が中学に入学した年であった。

スピードライティングの語数と評価の相関関係比較（表4）にあるように、相関指数は1994年度の0.92に対して、2008年度は0.77と減少している。これまでは一般論として、ライティングの語数はfluency（流暢さ）を表し、英語力を測るための有効な指標とされてきたが、そのことは1994年度の値にも反映されていると言えよう。ところが、2008年度は値が減少しており、英語力の指標としての語数の意義が低くなると判断できる。すなわち、2008年度においては、語数は英語力をはかる指標とはなりにくいことを示している。

2008年度に調査したスピードライティングの語数が1994年度より少ないと既述したが、一方、「自由に英語で文を書いた経験」（図6、7）は2008年度の方が増加しており、また、提出物に対して、「誤りの訂正を記入して返し

てもらう」(図8, 9)などのフィードバックも2008年度の方がより高い値を示している。この点には、現場教師の大きな努力が見て取れる。このような積極的な状況があるにもかかわらず、Composition ProfileにおけるContent, Organization, Vocabulary, Language Use, Mechanicsのうち、Organization、Language Useや文法などの点で不十分との印象が強かったことから、ライティングの量、fluencyの低下とともに、質、accuracyの低下も見て取れる。

1989年に学習指導要領が改訂され、Oral Communicationが導入されて20年経過した。この間の英語指導の方向性としては、fluencyの強調が継続しており、Native Speaker教師の増加、emailなどによるコミュニケーション手段の普及などにより、コミュニケーションを重視する語学力がある程度涵養されたとも言えよう。しかしながら、その一方で、英語教授の現場では、語彙数が少ない、文法の知識や読解力が不足している、発音がよくできない等の状況を実感している。fluencyの重視は否定するものではないが、確かなアウトプット (fluencyとaccuracy) のためには十分なインプット (vocabulary、grammarなど) が不可欠であるという、語学学習のいわば両輪をそろえた、バランスの取れた指導の重要性をもう一度見直す必要があるのではないかと考えられる。

5. おわりに

1994年度と2008年度の調査結果の比較検討によって、大学生の英語力は明らかに低下しており、学生を取り巻く教育環境の変化を踏まえ、現在の学生の現状に即した適切な英語指導、すなわち、十分なインプット (語彙、文法など) を行うことによって、英語力伸展の基礎枠の形成を目指した英語指導が必要であるとの認識を得た。

註

本論文は、2009年8月8日鳥取大学で開催された、第35回全国英語教育学会における口頭発表原稿に加筆訂正を施したものである。本研究に必要な基礎データ

の収集に協力して頂いた、林桂子先生（広島女学院大学）、源馬英人先生（同志社大学）、鈴木美紀子先生（同志社大学）と、的確なご指摘とご教示を頂いた編集委員会による2名の査読者に、心より感謝申し上げます。

1. 実態調査に用いたC-Test、スピードライティング課題、アンケート用紙は、以下のURLより参照することができる。
<http://muse.doshisha.ac.jp/pub/19942008/index.html>
2. アンケート調査結果の詳細は、以下のURLより参照することができる。
<http://muse.doshisha.ac.jp/pub/19942008/surveyresult.html>

参考文献

- 廣田輝子、岡田妙、奥村清彦、時岡ゆかり. (1995). 『大学における英作文指導のあり方：英作文指導実態調査の報告』. 大学英語教育学会（JACET）関西支部 英作文指導研究会紀要第1号
- Hughey, J. B., Wormuth, D. R., Hartfiel, S. A., & Jacobs, H. L. (1981). *Teaching ESL Composition: Principles and Techniques*. English Composition Program. Rowley: Newbury House.
- 文部科学省(1989). 「高等学校指導要領（平成元年3月）」 [2009年10月15日検索]
http://www.mext.go.jp/b_menu/shuppan/sonota/890304.htm

Keywords: college students' English ability, writing ability, large scaled survey